

玉作りの道具



●コレクション・データ

時代 弥生時代 中・後期
 調査 (左上) 唐古・鍵遺跡
 第13次調査
 発見年 (左上) 1982年
 大きさ (左上) 残存長 7.6 cm・幅 5.7 cm

唐古・鍵考古学
 ミュージアム
 【 ☎ 34・7100】

開館時間 午前9時～午後5時 (月曜は休館)
 観覧料 (カッコ内は20人以上の団体料金/15歳以下は無料)
 ▼大人 200円 (150円)
 ▼高校生・大学生 100円 (50円)

ヒスイをはじめとする玉類は、弥生時代には貴重な宝石であり威信財として、また、瘴邪的な意味を有する装身具として使われました。今回は、こうした玉類を作る道具を紹介します。

玉類の製作にはさまざまな道具が必要ですが、唐古・鍵遺跡からは、「石鋸」や玉を磨く砥石などが出土しています。

石鋸(写真①)は、紀ノ川流域で産出する紅簾石片岩が使われています。薄く剥離した長方形の石片を鋸のように前後に動かし、玉材を擦り切り分割します。一方、玉を磨く砥石(写真②)は、砂岩ホルンフェルス製で、表面にはU字形の3条の溝が残っています。成形された玉を磨き、形を整えるのに使ったのでしょうか。

また、勾玉や管玉には、紐を通す小孔がみられます。特に管玉の孔は、両端から直径1ミリのほどの小さな孔があげられています。この孔は、鉄製の錐?などを回転させあげたと推定されていますが、その作業では玉が割れやすく、玉の穿孔技術は今も

謎に包まれています。

さて、唐古・鍵遺跡では、製作途中の管玉(写真③)や、管玉に使われた碧玉の破片(写真④)が出土しています。玉の素材を持ち込んで、ムラ内で管玉の製作をしていたことを示しています。遠隔地の石川県や島根県で採取されたものが運び込まれた可能性が高く、当時の交易や交流を考えるうえでも注目されます。

一方、唐古・鍵遺跡では、新潟県姫川産ヒスイで作られた勾玉や、丹後産?水晶で作られた丸玉の完成品が出土しています。これらは素材が運ばれてきたのではなく、完成品がこの地に運ばれてきた可能性が高いのです。このことは、石材種の違いや製品の流通経路など玉作り集団が関わるさまざまな要因が想定されます。

このように唐古・鍵遺跡で産出しない貴重な玉の原石は、玉作り道具と石材の視点から各地との関係や玉の価値がそこに垣間見えます。

ミュージアム上面図と展示位置

